

## 少し昔の北部日本海のマイワシ漁と山形県の漁業

佐藤 洋（山形県水産試験場）

### 1. 北部日本海のマイワシ漁獲量の推移

1951年以降の富山県から北海道までの日本海側の属地統計によれば、マイワシの豊漁期は1950年前後と1980年前後の2回あったが、それぞれの時代でマイワシ漁に対する取り組みは大きく変化していた。まず、1回目は、戦後の食料不足の時代であり、4～5月のいわし漁で1年分の米櫃がいっぱいにできたというほどの豊漁で浜は湧いた。大漁の日は小中学校が休校になっていわし流し網から魚はずし作業に総動員で働き、魚類タンパク質の供給に大いに役だった。2回目では、戦後の時代とは違い、大中まき網漁業による大量漁獲や鮮度低下が早いいため単価が安く箱代にもならないことが多く、沿岸漁業者にとっては漁獲対象魚種としてあまり歓迎されないことが多くなっていた。

### 2. 山形県の漁業の推移

戦後のマイワシの豊漁にかげりが見え始めた頃、本県の漁業者によりさけます流し網漁業が開拓され、日本海のドル箱漁業として石川県以北に広まった。

1970年代は、高度成長時代から第一次オイルショックそして1977年の200海里経済水域時代と進み漁業情勢もどんどん変化していった。沿岸漁船漁業においては、推進機関は焼き玉エンジンからディーゼルに、船体は木造からFRPに、航海・漁労機器においても魚群探知機や記録装置の進歩があり漁獲効率が格段に向上した。反面、沖合漁業においては、さけます流し網漁業等は漁獲制限等国際漁業の規制強化による減船や乗組員不足により徐々に衰退していった。

この間の魚種別漁獲量の変化は、資源の自然変動によるほか上記の漁獲努力量の増減によるところが大きいと考えられた。

### 3. 大量斃死事例

1981年春、多くの底びき網漁業者から「タラ場で操業していたら死んだイワシが大量に入り網中臭くなった」と漁協に連絡があり、4月21日「山形県まいわし対策協議会」を設置し被害状況や被害漁場の把握に努め、水産試験場には最上丸の調査出動の要請があった。本県の調査によれば斃死がみられた海域は、新潟県境から秋田県境までの水深70～500mであったが、新潟県のえびかご漁業や深い水深帯で操業している本県のばいかご漁業でも漁にならないとの報告もあり、実際はもっと広い海域に影響を及ぼしていたものと考えられた。また、底びき網漁業においては、一部の漁獲物が売り物にならないという状況が9月まで続いた。

この原因としては、越冬場所が北限を超えたために冷水塊に包囲されたとの説や豪雪による雪代の影響説などがあった。

終わりに

「世界人口が70億人を突破し、飢餓人口40億人を救えるのはイワシしかなく、今から大量の漁獲物を冷凍・加工できる体制を作り世界の食料危機を乗り越えよう」と提言する。